

子ども

シニア



②⑦

田中 伸哉

前回、石炭のタールをウサギの耳に塗ってがんを人工的に作り出した実験について触れた。1915年に発表された実験だ。これはタールに含まれる化学物質が発がん性があったことが原因である。

それから21年。36年に、化学物質を含む食品添加物にも発がん性のものであることをはじめて指摘したのが、当時大阪大学にいた木下良順だ。

木下良順

食品添加物の発がん性指摘



木下は、当時マーガリンなどに使われていた、食品添加物の一種である黄色い合成着色料のバタージェロ(ジメチルアミノアゾベンゼン)をラットに食べさせ、肝臓がんができたことを報告した。この食品添加物に含まれた化学物質が正常な細胞のDNAに結合し遺伝子に変異をおこし、がんの原因になったのだ。

木下の指摘は、日ごろ一般の人が口にする食べ物に発がん性のものが含まれていることだっただけに、衝

撃を与えた。

食品添加物には、色を付ける合成着色料、香りを出す香料、防腐剤などがある。その中には化学物質由来のものもあれば、花や虫など天然由来のものもある。国は食品に使える食品添加物を定めており、化学物質由来の食品添加物は「指定添加物」413品目の中に含まれている。

これらは使用制限量もそれぞれ定められている。しかし日本と海外では化学物質由来の食品添加物の規制が異なる。日本ではOKでも海外では禁止されているものもあり、さまざまな研究と議論がある。

大阪大学に来る前の木下は、東大を卒業し、英国、ドイツに留学後、26年に33歳の若さで北大の病理学第2講座の教授となった。木下が北大で使った重厚感のある木製の机は今も残っている。

(たなか・しんや) 北大医学部腫瘍病理学教授